

身体名詞由来の空間名詞が持つ特徴について

—空間名詞「脇」の空間を定める諸要素—

安 在珉
 京都大学[院]
 ajm0829@yahoo.co.jp

1. はじめに

モノ同士の位置関係を表すときに身体名詞を用いて表現することは様々な言語で観察される方法であるが、ほとんどの位置関係を表す表現に身体名詞を用いるミシュテック語のような言語もあれば、身体名詞由来の空間名詞が少ない日本語のような言語も存在する。本稿では身体名詞が持つ空間的用法について、とりわけ日本語の「脇」が表す空間にどのような空間的特徴および制約が見られるのかを考察する。

2. 日本語における空間表現

2.1 空間参照枠

モノ同士の位置関係を言語化する方法としてよく知られているのが、Levinson(1996, 2003)による絶対的参照枠・相対的参照枠・固有的参照枠の分類である。

「絶対的参照枠」は、地形・磁場のように動かないとされるものを基準に位置関係を表す方法で、東西南北や山側・海側(神戸、東北沿岸部の一部地域で使用)などがその例である。

「相対的参照枠」は、右・左のように、話者の視点・参照物・対象物の関係に基づいて位置関係を表す方法である。これは視点の置き方や、対象物と参照点の移動によって表す空間も変わるので相対的である。

「固有的参照枠」は、機能性や形など、参照物が持つ何らかの内在的特徴に基づいて位置関係を表す方法である。例えば「テレビの前」は画面がある方が前として認識され、「(進行中の)電車の前」といえば進行方向に基づいて前後の認識が決まる。

Levinson の分類に基づくと、日本語は主に相対的参照枠で位置関係を表す言語であると考えられるが、身体名詞を空間表現に用いる方法や、参照物の内在的特徴で決まる前後を空間表現に用いる固有的参照枠の表現も存在する。

2.2 日本語における身体名詞の空間的用法

日本語には身体名詞を空間名詞として使うケースが比較的少ないと考えられるが、日常会話で「バスのお尻に広告が付いている」「富士山の頭に雲の白い筋が見える」のように、位置関係を表すのに身体名詞が使われた表現を耳にすることはさほど珍しいことではない。しかし「お尻」や「頭」のような名詞は、空間名詞として完全に定着して広く使われているとは言い難いのに対し、本稿で分析する身体名詞「脇」は、本来の意味から拡張された空間的用法が独立した空間名詞としての役割を担っていると言える。

3. 空間名詞「脇」の空間を定める諸要素

それでは身体名詞由来の空間名詞「脇」にはどのような特徴があるだろうか。本稿では、身体名詞の身体的特徴がその空間的用法にも反映されている可能性が高いという見方に基づいて、具体的にどのような要素が意味に反映されているのかを分析する。

3.1 参照物の形と対象物の位置関係

参照物となるモノが、形などの内在的要因から前と後ろが決まっている場合、対象物となるモノの位置の解釈は、参照物の前と後ろ

ではない空間になる可能性が高い。逆に参照物となるモノに前後が決まるような内在的要因がない場合、対象物となるモノの位置の解釈はより分散される可能性が高く、話者の視点によって変わり得る。

例えば「ビルの脇」が表す空間は、ビルの入り口によって決まる前後を除いた空間になる可能性が高く、同じ形をしたビルでも前後が認識されない状況ではビルの周り全体に解釈が分散される可能性が高い(図1)。また「駐車場の脇」が表す空間も、入り口があるところが駐車場の前として認識され、解釈は入り口がある方ではない空間になる(図2)。

これは人間の身体で前と後ろではない左右に脇が位置することが空間的意味にも反映された結果であると考えられるが、参照物そのものの形で決まるというよりは、話者が参照点の形をどのように認識しているかによると考えるべきである。

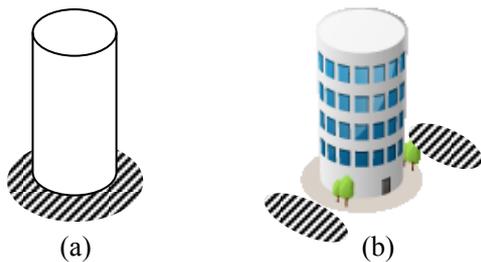


図1 参照物の形による「ビルの脇」の変化

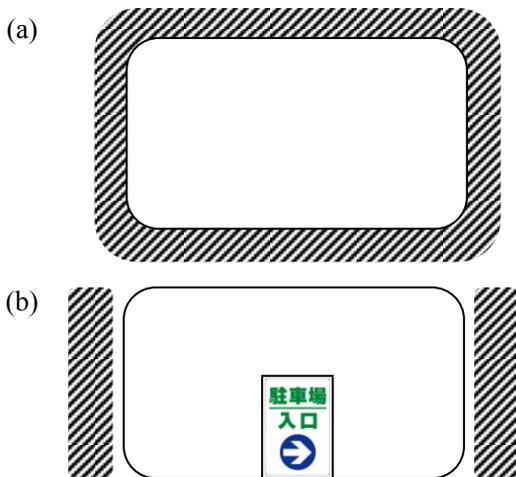


図2 参照物の形による「駐車場の脇」の変化

3.2 参照物と対象物の大きさ (相対的比率)

身体から脇が占める部分の割合を考えると、参照点となるモノ(R)より対象物(T)が(かなり)小さい方が容認度が上がると考えられる(図3)。

例えば「バスの脇に猫がいる」という文は容認度が高いが、「バスの脇に他のバスがある」という文は違和感があり、容認度が下がる。しかし他の空間名詞、とりわけ前と後ろ、上と下の場合は、参照物より対象物が小さくなければならないという制約はなく、「バスの右に猫がいる」と「バスの右に他のバスがある」では容認度の差がないと言える。

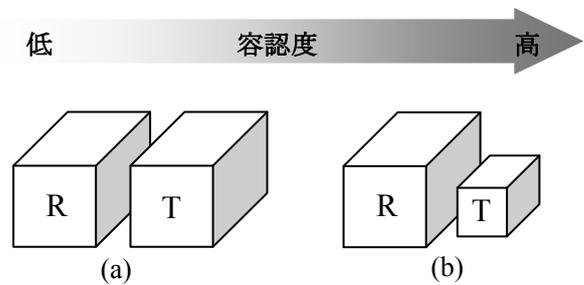


図3 参照物と対象物の大きさによる容認度の変化

3.3 参照物と対象物以外の周辺要素の変化

参照物となるモノに前や後ろ、表や裏を判断できるような内在的要因がなくても、機能的特徴、つまり参照点のある部分が「使われている」という状態認識が脇の空間解釈に影響を与える場合がある。

例えば図4の「テーブルの脇にコーヒーが置いてある」という文の容認度は、(a)と(b)でかなり差がある。(a)の場合はコーヒーがテーブルの脇にあると認識できるが、(b)のようにテーブルの一部が人によって使われていると認識される場合は、上記の文の容認度はかなり下がる。これは人に使われることによって「中心から離れた周辺」という認識が薄くなることが原因であると考えられ、参照物と対象物の位置関係以外に周辺環境によっても空間的解釈が変わり得ることを示唆する。

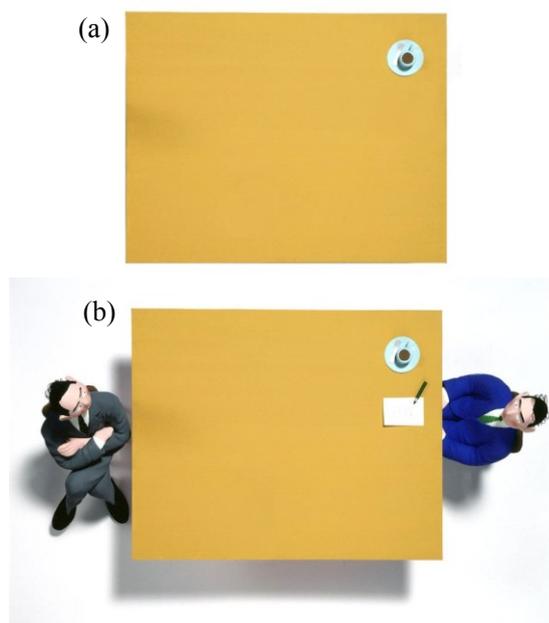


図4 周辺要素の変化による「テーブルの脇にコーヒーが置いてある」の容認度の変化

3.4 参照物と対象物、述語との関係

「Rの脇にT(が/を)Vする」という文の解釈は、基本的に参照物(R)から想起されるフレーム、対象物(T)から想起されるフレーム、そして述語(V)によって想起されるフレームの重なる部分から特定されることになり、同じ参照物と対象物でも述語によって空間解釈は変わり得る。そして参照物と述語が同じでも、対象物から想起されるフレームによって解釈が変化する場合もある。

例えば「テーブルの脇にかばんを置く」という文の解釈は、テーブルの上と下どちらにもなり得るが、「テーブルの脇にかばんを乗せる」という文はテーブルの上の片隅という解釈だけ可能となる。一方、「テーブルの脇にストーブを置く」という文は通常テーブルの下の空間を表すことになるが、「テーブルの脇に花瓶を置く」はテーブルの上の片隅になる可能性が高い。

4. おわりに

本稿では身体名詞が持つ空間的用法について、日本語の「脇」が表す空間にどのような空間的特徴および制約があるのかを考察した。身体名詞「脇」は、他の身体名詞とは違って

空間名詞としてもかなり定着した状態であると言えるが、その空間的用法には、参照物の前後以外の空間が解釈として優先されたり、参照物と対象物の大きさによる制約が存在するなど、身体名詞としての特徴が反映されている。また、中心から離れた周辺という意味が強く、たとえ対象物が参照物の中心から離れているとしても、参照物の一部が人によって使われるなど周辺環境に変化がある場合は解釈の容認度が変わり得る。

参考文献

- 安在珉. 2012. 「身体名詞の意味拡張による空間的用法について—日本語「脇」が表す空間の曖昧性を中心に—」『言語科学論集』18: 83-98.
- 安在珉. 2013. 「日本語の空間名詞「上・下」が表す空間について」『第14回認知言語学会予稿集』229-232.
- 青木三郎・竹沢幸一(編). 2000. 『空間表現と文法』東京: くろしお出版.
- Herskovits, Annette. 1986. *Language and spatial cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 廣瀬文男・池原悟・村上仁一. 2001. 「日本語で表現された対象物の位置的関係の解析」『情報処理学会研究報告. 自然言語処理研究会報告』2001(112): 61-66.
- Kim, Sung-Gyeong. 2006. Classification of Japanese Spatial Nouns. *Foreign Languages Education* 13(2): 477-487. (金聖京. 2006. 「日本語空間名詞の分類: 参照点との位置関係を中心に」『Foreign Languages Education』13(2): 477-487.)
- 久島茂. 2002. 『《物》と《場所》の意味論』東京: くろしお出版.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- Levinson, Stephen C. 1996. Language and Space. *Annual Review of Anthropology* 25: 353-382.
- Levinson, Stephen C. 2003. *Space in Language and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』
東京：研究社.
- 徳永健伸・小山智史・齋藤豪. 2004. 「日本語
空間名詞の分類」『情報処理学会研究報告.
自然言語処理研究会報告』108: 135-140
- 篠原和子・松中義大. 2005. 「日本語の空間語
彙と参照枠についての実験的研究」『日本
認知言語学会論文集』2005(5): 471-481.
- 篠原和子. 2006. 「空間認知実験と時間メタフ
ァー」、山梨正明他(編)『認知言語学論考
No.6』1-40. 東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：く
ろしお出版.